

Ocean Breeze

オーシャンブリーズ



「羅針盤が標す光路」
(海洋生態系科学部門 石山 玄樹)



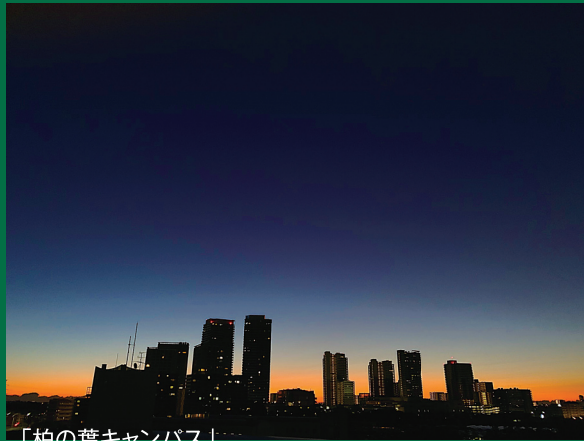
「上空から見た黒島」
(海洋生命科学部門 河合 萌)



「柏の葉公園の宝」
(海洋生物資源部門 猪股 雅史)



「充実した人生」
(国際連携研究部門 齊藤 宏明)



「柏の葉キャンパス」
(国際連携研究部門 齊藤 宏明)



「石亀」
(海洋生命科学部門 呂 律)



「上る太陽下船を控えて」
(海洋生態系科学部門 矢萩 拓也)



「雪のキャンパス」
(国際連携研究部門 齊藤 宏明)



「希望の手触り」
(地域連携研究部門 大土 直哉)



「3年ぶりの神輿」
(地域連携研究部門 大土 直哉)



「悠々自適海中ライフ」
(海洋生物資源部門 須田 大朔)

「輝き(スジウイカ)」
(海洋生物資源部門 中山 新)

「2022年度AORI写真コンテスト」受賞作品
▶詳細はP.07をご覧ください

特集 大気海洋研究所の組織改編(2022年度)

報告 | 日台海洋協力対話 台湾代表団の来訪

研究航海レポート

空と海の文学 第11回 | 日本の名随筆 56 海

研究人生よもやま話④ | 海のない県に生まれ、ここに流れ着きました
イベントレポート

新スタッフ紹介

著者による新刊紹介

なぜ君たちはグルグル回るのか 海の動物たちの謎
たくさんのふしぎ 2022年11月号

新種発見! 見つけて、調べて、名付ける方法

受賞/人事異動一覧

大気海洋研究所の組織改編 (2022年度)

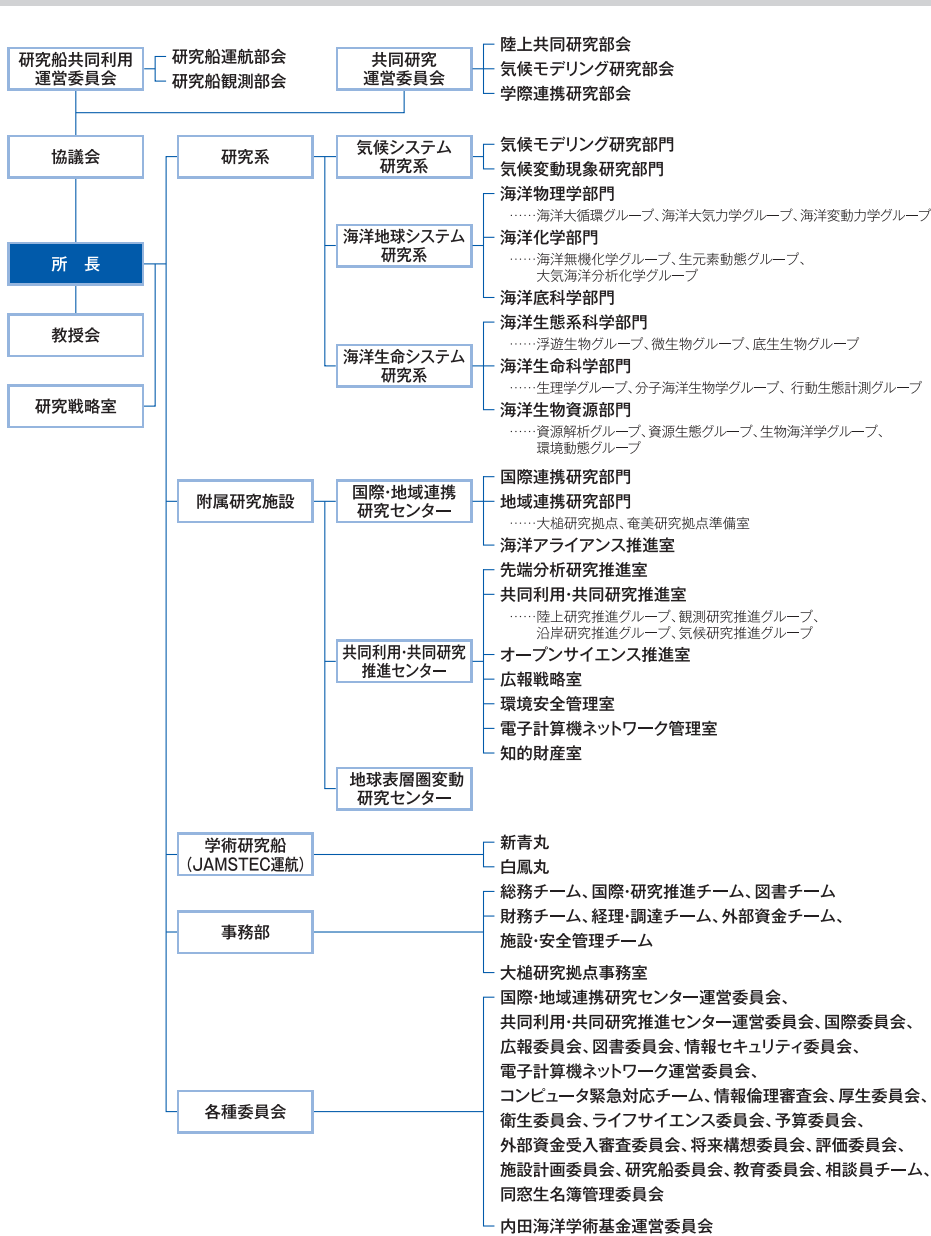
東京大学大気海洋研究所 所長 河村 知彦

地球環境問題が社会的・国際的に顕在化・重大化し、大気海洋科学の重要性が増しているなか、海洋国家かつ水産先進国である日本の国際的役割は今後ますます大きくなるでしょう。そのような情勢の中で、国内で唯一の大気海洋科学の共同利用・共同研究拠点となっている私たち東京大学大気海洋研究所の役割もより一層重要になってくると考えられます。大気海洋研究所は、2010年に旧海洋研究所と旧気候システム研究センターが統

合して発足しましたが、それから10年以上が経過し、東日本大震災で被災した沿岸センターの復旧も2019年度には完了しました。科学の進展と社会情勢の変化に応じて、基盤分野の維持・継続と同時に、状況に応じた柔軟な人員体制、科学分野の流動性の確保が必要になっていることから、2020年度に将来構想委員会を活性化し、その議論に基づいて今後の大気海洋科学のありかたと研究の方向性、共同利用・共同研究拠点としての使命

についての提言を纏めました。また、2020年度に実施された外部評価により、過去10年間の活動内容が評価されると同時に、今後の課題等についての提言もいただきました。このような背景と経緯に基づき、大気海洋研究所では2022年度に、2010年度の発足以来となる大規模な組織改編を行いました。その概要についてはすでにOcean Breeze第39号でお伝えしましたが、今回改めてその経緯や詳細をご報告いたします。

▶ 2022年度組織図 Organization of AORI



組織改編の要点は以下の2点です。すなわち、①大気海洋科学の各研究分野の発展に貢献する役割を継続しながらも、教員定員数の変動や今後の情勢変化に柔軟に対応可能な体制を構築し、業務の効率化を図るため、人員など運営の単位を大きくする。②東京大学大気海洋研究所の役割・重要性を明確にするため、国際貢献、地域貢献、科学コミュニティーへの貢献、地球温暖化や海洋プラスチックなど社会問題への取り組みを強化・明確化する体制とする。

①に対応する改編としては、研究組織の最小単位となっていた分野(研究室)を廃止し、部門を研究および教員配置に関する運用単位としました。組織名からも分野の名前を削除しました。ただし、大気海洋科学の各研究分野に貢献するという観点から、部門によっては研究グループという教育・研究のユニットを当面は残すことにしました。また、個々の大学院生の教育には複数の教員が係わることとし、ゼミなどの教育の単位は現在の研究分野よりも小さくならないようにします。

②に対応する組織改編として、附属研究施設として設置していた5つのセンター(国際沿岸海洋研究センター、国際連携研究センター、地球表層圏変動研究センター、高解像度環境解析研究センター、共同利用共同研究推進センター)を以下の3センター(国際・地域連携研究センター、共同利用・共同研究推進センター、地球表層圏変動研究センター)に再編しました。

1

国際・地域連携研究センター

(Center for International and Local Research Cooperation)

国際沿岸海洋研究センターと国際連携研究センターを統合して国際・地域連携研究センターとし、センター内に国際連携研究部門（通称：国際連携研究センター）と地域連携研究部門を置く。また、海洋アライアンス推進室を新たに設置する。地域連携研究部門内には、これまでの国際沿岸海洋研究センターに相当する大槌研究拠点（通称：大槌沿岸センター）および奄美研究拠点準備室を新たに設置する。奄美研究拠点準備室には専任教員を配置し、亜熱帯研究の拠点となる施設を奄美大島に設立することを旨として研究ネットワークの構築と地域連携活動を開始する。



大槌沿岸センター



奄美研究拠点

2

共同利用・共同研究推進センター

(Center for Cooperative Research Promotion)

共同利用・共同研究に関わる機能を強化することを目的に、高解像度環境解析研究センターと共同利用共同研究推進センターを統合して共同利用・共同研究推進センターとし、センター内に先端分析研究推進室、共同利用・共同研究推進室を置く。あわせて所内の別組織であった関連する組織・機能（広報戦略室（旧広報室）、環境安全管理室、電子計算機ネットワーク管理室、知的財産室）を本センター内に一元的に配置する。さらには、大気海洋科学のオープンサイエンスを推進するため、オープンサイエンス推進室を新たに設置する。

3

地球表層圏変動研究センター

(Center for Earth Surface System Dynamics)

組織上の再編は行わないが、分野を超えた新たなシナジーを生み出す全所的プロジェクト研究を推進する組織とし、所のグランドチャレンジを先導する場とする。変動センター全体の将来方針の策定などについては、所長室の下部組織として新たに設置した研究戦略室で行う。プロジェクト雇用ではない常勤のセンター教員は、研究系の関連する部門または国際・地域連携研究センターを主務とし、変動センターを兼務する。兼務教員は、プロジェクトに応じて柔軟に追加・停止できる。

私たち東京大学大気海洋研究所は、今後も大気海洋科学の共同利用・共同研究拠点として「地域の海空から世界の海空まで」をカバーした大気海洋科学を展開し、地球環境問題の解決とともに地域振興にも貢献していきたいと考えています。今後とも皆様のご支援・ご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

報告

日台海洋協力対話 台湾代表団の来訪

大気海洋研究所は、国立台湾大学および台湾海洋大学と科学連携協定を結ぶなどして、台湾と活発な研究交流を行っています。このなか、2023年1月に、日台海洋協力対話の台湾代表団として来日した、国家科学技術委員会（NSTC）自然科学・持続的発展部門の羅夢凡（Meng-Fan Luo）所長、台湾海洋連合（TOU）CEOの蔣國平（Kuo-Ping Chiang）台湾海洋大学教授らが大気海洋研究所を訪問し、今後の日台海洋研究について意見を交換しました。

日台海洋協力対話とは、日本政府との緊密な連携の下に台湾との実務関係に携わる公益財団法人日本台湾交流協会と、台湾の対

日窓口機関である台湾日本関係協会が、日台間の互恵的な海洋協力を強化することを目的として行われる会合です。NSTCは台湾の産業も含めた科学技術政策の立案および科学研究費を所轄し、TOUは大学教員を中心とした海洋科学に関するシンクタンクです。

忙しい日程を縫って来訪された代表団を、河村所長、兵藤副所長らが出迎え、引き続き今後の海洋研究協力についての議論が行われました。羅所長は、日本と台湾の共通の科学問題解決のため、特に長期的な研究協力体制確立、若手研究者交流・学生交換事業への強い期待を示しました。これに対し、大気海洋研究所は、白鳳丸研究航海等の共

同研究、若手派遣・招聘、学生交流の長期にわたる実績を示し、さらなる連携の機会を探していることを説明しました。また、連携活動を推進するためには、適切な共通研究課題の設定が有効であり、例えば地球温暖化に伴う日本の亜熱帯化という緊急の問題に対し、台湾から日本に至る海域での比較研究が共通の課題の一つとなり得るものであることを提案しました。今回の会合では、台湾側の共同研究教育活動への強い興味を確認され、今後の連携活動を強化する良い機会となりました。大気海洋研究所は、国際連携研究部門を中心に、今後も台湾との連携研究を推進していきます。（齊藤 宏明）

右から陳佩芬NSTC副研究員、蔣國平教授、羅夢凡所長、河村所長、兵藤副所長、齊藤（2023年1月12日）



研究航海レポート

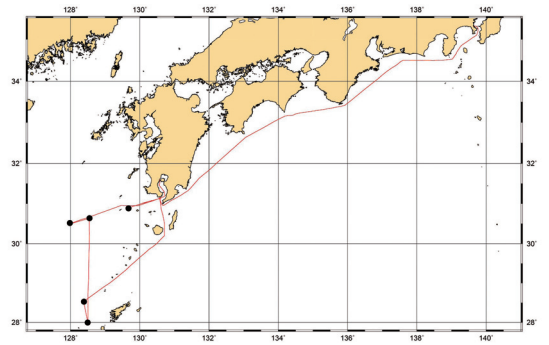
新青丸 KS-22-15次研究航海

観測海域 東シナ海黒潮周辺海域

航海期間 2022年10月16日～10月27日

航海の研究題目 凝集体生命圏：ナノ・ピコプランクトンを主体とした亜熱帯貧栄養海域における生物炭素ポンプの駆動機構の解明

主席研究員 福田 秀樹 地域連携研究部門(大槌研究拠点)准教授



航跡/測点図

[貧栄養環境に漂う微生物群集のホットスポットを追う]

有機物をはじめとするさまざまな物質が集積した海水中の凝集物の沈降過程は、大気中の二酸化炭素を海洋深層へと輸送する生物炭素ポンプの中核を担っています。一方で、餌資源が希薄な貧栄養環境の中では、凝集物は微生物たちが集まる“ホットスポット”にもなっています。住環境としての凝集物は、餌資源との豊富な接触が望める一方で、海水中を遊泳している間には出会わないような対象による捕食や、深層への沈降といったリスクも抱えており、微生物の生存戦略を考える上でも興味深い存在となっています。DNAを用いた生物相の解析を行うためにマリンスノーキャッチャーやニスキン採水器を用いて、沈降速度の異なるさまざまな粒子の採取を行いました。(福田 秀樹)



鉛直多層式-開閉ネットによる動物プランクトンの採取とマリンスノーキャッチャー内に漂う懸濁粒子の採取



マリンスノーキャッチャーの底部に沈殿した沈降粒子の回収

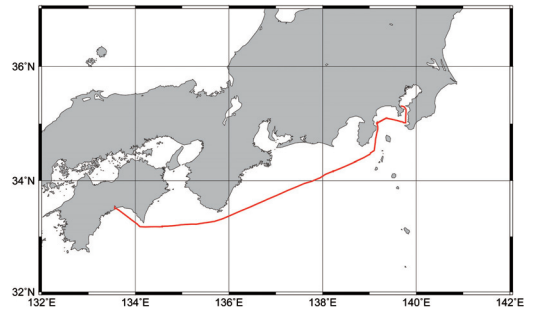
新青丸 KS-23-1次研究航海

観測海域 相模湾

航海期間 2023年1月6日～1月10日

航海の研究題目 共同利用研究航海のための観測機器の性能確認試験

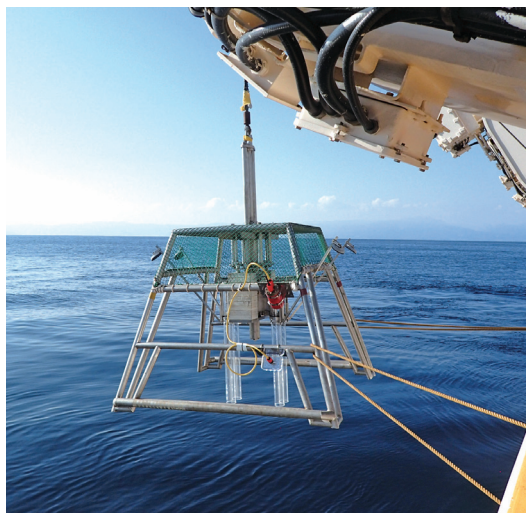
主席研究員 石垣 秀雄 共同利用・共同研究推進室(観測研究推進グループ)技術専門職員



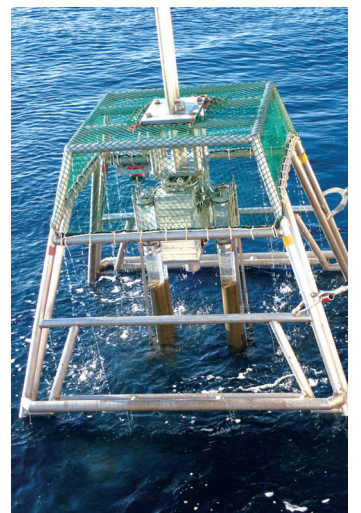
航跡図

[少しでも多い泥サンプルを求めて]

毎年、新青丸と白鳳丸では試験航海を実施しています。両船とも共同利用観測機器の動作確認が主な目的ですが、必要に応じて改良試験も実施します。今回の新青丸試験航海では、CTD、VMPSおよびアシュラ型コアラーの動作確認の他に、マルチプルコアラーの改良試験を実施しました。改良内容を簡単に書くと、採泥量を多くするために現状よりも40cm長い採泥管に変更したことです。今回の試験では、通常より30cm程度長いサンプルが採取されましたが、マルチプルコアラーを改良することで、更にサンプル量を増やすことが可能であると考えています。サンプル量は海底の状態によっても変わるので、この点も考慮しつつ、引き続き試験をしていく予定です。(石垣 秀雄)



マルチプルコアラー(投入時)



マルチプルコアラー(揚収時)

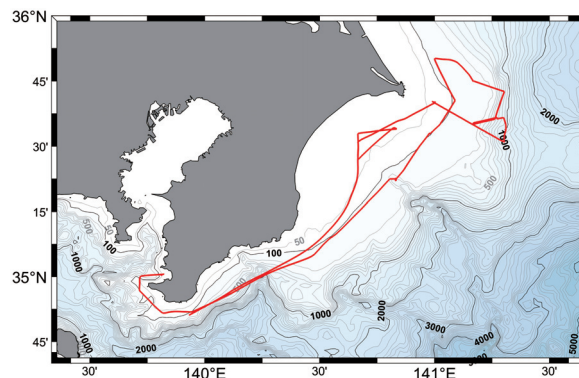
新青丸 KS-23-2次研究航海

観測海域 常磐・房総沿岸

航海期間 2023年1月14日～1月20日

航海の研究題目 常磐・鹿島沖陸棚上における陸起源物質の分布と輸送過程

主席研究員 伊藤 幸彦 海洋生物資源部門 准教授



航跡図

【冬の房総沖での物理・化学・生物・地質観測】

2021年5月に実施した新青丸KS-21-8航海に引き続き、房総半島の「沿岸-外洋移行帯」において海水の混合過程を調べる調査を実施しました。これまでの調査では、海流の構造や混合過程など「水の物理」を中心として調べてきましたが、今回は海底堆積物から溶出する栄養塩の量も調べるため、マルチプルコアラーを使用して海底堆積物の採取も行いました。1月の荒れる海で沖に出られたのは限られた時間でしたが、新青丸の船長以下乗組員の皆さんの協力と、乗船研究者の尽力で、さまざまな貴重なデータを取得することができました。マルチプルコアラーの実施に際しては、所内外の皆さんにご助言・ご指導いただきました。所内では乙坂准教授、芦田技術専門職員にご協力いただきましたので、この場を借りて御礼申し上げます。（伊藤 幸彦）



マルチプルコアラー投入の様子

白鳳丸 KH-22-8次研究航海

観測海域 南部千島海溝および日本海溝の周辺海域

航海期間 2022年9月30日～10月17日

航海の研究題目 北西太平洋の海溝域に生息する底生生物の生物相と進化過程の網羅的解明

主席研究員 小島 茂明 海洋生態系科学部門 兼務教授

【超深海生物の進化を探る】

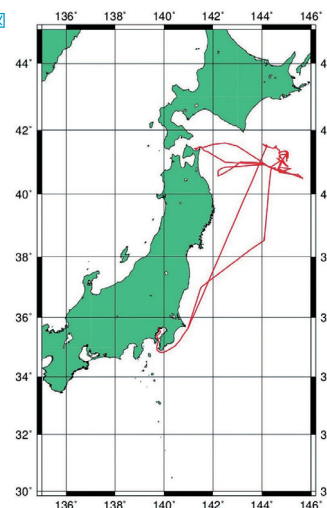
本航海は海山の沈み込みにより分断された千島海溝と日本海溝の超深海帯（水深6500m以深の部分）を含む深海底に生息する生物の種組成や種内の遺伝的分化を解析することで深海における生物進化の実態を捉えることを目的としており、その前半が2022年度に実施されました。

海溝間の海水の流れを長期観測するために一昨年の新青丸航海で設置した4基の係留系を回収し、千島海溝6測点と日本海溝7測点で底生生物の採集をおこないました。得られた生物標本は全国の系統分類学研究者の研究に供され、既に記載論文が投稿されているほか、インターシップ実習でも活用される予定です。（小島 茂明）



観測終了後の記念撮影

航跡／測点図



HADEEP Project(2006-2010)以来の再会となる超深海産シロカイクサウオ



第11回

日本の名随筆 56 海

辻 邦生(編)
B6判・256ページ・1,800円(税抜)
1987年5月・作品社
ISBN : 4-87893-956-7

近・現代の随筆を網羅した全集の一つ。シリーズの中には、大気海洋の分野では本書のほか、「32.魚」「51.雪」「79.港」もある。本書は金子光晴の詩から始まり、遠藤周作、北杜夫、井伏鱒二らが、思い出をもとにさまざまな海観を語る。巻末に編者あとがき、執筆者紹介や出典のほか、ブックガイドによる海関連の読書案内も収載されている。

この中に、井上ひさしの「港の別れ唄」がある。

井上は、東京での生活や言葉のコンプレックスに悩み、大学を休学して母が屋台を営む釜石で過ごすことになる。訪れた釜石は、クール・ファイブが唄っていた「港の別れ唄」にあるような、港町は悲劇的だという予断とは大きく異なる街だった。岸壁には2万トン近い外国鋼鉄船、数キロに及び千を越す大小の漁船が舫^{もや}っており、大漁旗が秋風になびく。歓楽街は外国人船員や製鉄所の作業員が行き交い、数百条ものサンマを焼く煙が立ち上る。漁師たちは女たちに「行ってくるよ」と言って出漁し、「帰ってきたよ」と新鮮な魚を

ぶら下げて帰ってくる。こんな「別れ」とは程遠い港町の賑わいの中での商魂逞しい母との生活ぶりが、面白おかしく語られている。

後半になって、後年、井上が再び縁の地を訪れたときの心境に触れている。

鉄と魚の共存が破れ、さびれつくした街の様子を目の当たりにし、「どんな商才があっても無理」と諦念漂わせ嘆いている。釜石の「港の別れ」とは、男と女ではなく、人間と自然との別れだった。

高炉の火が消えて久しく、震災も経験した釜石で、今や外国人船員の姿を見かけることもあまりない。ただ、近年、若者の地元志向が高まっていて、UIターン者も増えつつある。その中には、井上のように都会で苦い経験をした者もいるかもしれない。そんな人たちが、この先どうなるか分からない厳しい現状を認めつつも、どうすればかつての港町により良い将来をもたらすことができるのか、希望をもって気負わずに試行錯誤してくれているように見える。

(北川 貴士)

研究人生よもやま話 34

海のない県に生まれ、ここに流れ着きました

森山 彰久 共同利用・共同研究推進室(陸上研究推進グループ) 技術専門職員

子供のころから淡水魚が好きでした。海の魚でないのは、生まれ育ったのが海のない長野で、海に馴染みがなかったからでしょう。大学では淡水魚の研究をしたいと思い、持っていた淡水魚図鑑の著者(水野信彦先生)が教授をされていた、四国の愛媛大学を受験しました。実は四国という地域は、淡水魚の主流?であるコイ科の魚の種類が少ない場所だったのですが、その代わりに海から川に進出してきた魚が豊富に生息しています。私の卒業・修士論文の対象になったのも、そういった魚たちでした。

ヨシノボリ類など河川にいるハゼ類の多くは、子供時代の一時期のみ海で生活します。川で卵からふ化した仔魚は、川の水と一緒に海まで流され、海でしばらく浮遊生活をし、泳ぐ力がついてから川に上がってくるのです(両側回遊といえます)。私の研究は、川の上流と下流で流下途中のヨシノボリ類の仔魚を採集し、「ふ化してからの日数」を推定するというものでした。日数の推定には、耳石という魚の耳にできる石を調べます(当時、海洋研究所の助教

授だった塚本勝巳先生と技術職員の矢野真知子さんに技術指導を受けました)。

事前の予測として、私は上流で採集した仔魚よりも下流で採集した仔魚のほうが耳石は大きい(ふ化後の日数が長い)と思い込んでいました。仔魚が川上から川下に流されることはあっても、その逆はないからです。しかし実際に調べた結果はまったく逆でした。下流で採れた仔魚の耳石はふ化直後である小さいものばかり、上流で採れた仔魚の耳石のほうが大きかったのです。なぜこういう結果になったか? 私が出した「答え」は紹介しませんので、皆さんで想像(推理)してみてください。

さて、大学院終了後、海洋研究所の資源解析部門に技術職員として採用されました。当時の資源解析部門は、水産資源の漁獲量や生息量のデータを解析し、資源の持続的な利用に役立てることを主な研究課題としていました。取り扱うのは主に数字であり、武器となるのは数式です。松宮義晴教授(当時)に初め

てお会いした際に「数式を見て眠くなったりし

ませんか」と冗談交じりに質問されたのを覚えています。その後、技術職員は研究室でなく研究所全体の業務を、という方針により、今の共同利用・共同研究推進センターに移りました。業務としては生身の生物からは長らく離れていましたが、近年は生物を扱う機会も増えてきました。何となく昔に戻ったような、懐かしい気もしています。



大学院時代の主要調査地点であった鱈(みな)川(高知県黒潮町)の上流域。ヨシノボリの繁殖シーズンは、近くの公民館の一室をお借りし、泊まり込んで調査を行っていました。



エントランスホールでのポスター展示の様子

大気海洋研究所一般公開 ～空と海が教えてくれること～

東京大学柏キャンパス一般公開が2022年10月21日(金)～28日(金)に開催され、大海研ではオンライン企画に加え、ポスター展示等の会場企画も準備しました。ほとんどの部局では実地企画が見送られ、21日(金)・22日(土)の部門・センターのポスター展示にどれだけ来場されるのか不安でしたが、両日で約400人のご来場がありました。多くの来場者で賑わった2019年以前とは違った趣で、来場者がポスターを静かにじっくりご覧になっている様子が印象的でした。

なお、オンライン企画「JOIDES Resolution号からライブ配信 ー大西洋の夜明けを見ようー」「空と海の講演会2022」(一部)はアーカイブで視聴いただけますので、以下のページでぜひご覧ください。

(研究交流小委員会／広報戦略室)



■ 大気海洋研究所一般公開2022 ～空と海が教えてくれること～

https://www.aori.u-tokyo.ac.jp/aori_news/information/2022/opencampus_2022.html

2022年AORI卓球大会



エントランスホールで久々に歓声が上がりました

今年度は42作品(5部門)の応募がありました。私たち厚生委員は、「コロナで大学院生活の楽しみが少なく、今の学生は気の毒だなあ」と言う気持ちがあったので、現状でも楽しめるコンテストを目指しました。昨年からWEB展示を行ったところ、大槌の人たちも参加できたり、忘年会でZoomを介して受賞作品を紹介できるなど、新しい楽しみ方を発見しました。今回はエントランス展示も行い、本来の味わいも復活させました。遊び心の共有も、大海研が目指すべき良い研究につながる、と信じています。イベントを盛り上げてくださった皆様、ありがとうございました。(厚生委員会 井上 潤)

※受賞作品は表紙でご覧ください。

コロナ禍による活動制限により2020年から各種イベントが中止となっていました。今回約3年ぶりに卓球大会が開催されました。2022年11月15日～12月7日、5チーム参加の総当たりリーグ戦を行いました。以前のように予選リーグ・決勝トーナメントはできませんでしたが、参加5チームによる熱い試合が繰り広げられました。

参加チームは、海洋物理学部門・海洋化学部門・海洋生態系科学部門・海洋生物資源部門・気候システム研究系の5チームで、優勝は海洋生物資源部門、準優勝は気候システム研究系でした。

参加いただいた構成員のみなさま、ありがとうございました。2023年に再び開催できることを願っています。(厚生委員会 赤塚 健一)

2022年度AORI写真コンテスト

「大気海洋研究所」部門	所長賞/最優秀賞 優秀賞	「羅針盤が標す光路」 「雪のキャンパス」	(海洋生態系科学部門 石山 玄樹) (国際連携研究部門 齊藤 宏明)
「海・空」部門	最優秀賞 優秀賞 優秀賞	「上空から見た黒島」 「石亀」 「上る太陽 下船を控えて」	(海洋生命科学部門 河合 萌) (海洋生命科学部門 呂 律) (海洋生態系科学部門 矢萩 拓也)
「生き物」部門	最優秀賞 優秀賞	「柏の葉公園の室」 「輝き(スジコウイカ)」	(海洋生物資源部門 猪股 雅史) (海洋生物資源部門 中山 新)
「人物」部門	最優秀賞 優秀賞	「充実した人生」 「希望の手触り」	(国際連携研究部門 齊藤 宏明) (地域連携研究部門 大土 直哉)
「その他」部門	最優秀賞 優秀賞 優秀賞	「柏の葉キャンパス」 「3年ぶりの神輿」 「悠々自適海中ライフ」	(国際連携研究部門 齊藤 宏明) (地域連携研究部門 大土 直哉) (海洋生物資源部門 須田 大朔)

大気海洋研究所忘年会・音楽祭の開催

2022年12月9日(金)に所内の忘年会・音楽祭が開催されました。第一部の忘年会は、今回もオンラインでの開催となりましたが、約50名が参加して2022年の労をねぎらいました。またお魚倶楽部はまの特製オードブルが企画され、お寿司やあん肝、紅茶鴨の三色巻など、美味しい料理に舌鼓を打ちました。

第二部の音楽祭は、オンラインと現地のハイブリッド開催となりました。管弦楽アンサンブル、フラ&ウクレレ、ギター、ハンドベルの演奏はどれも魅力的で素晴らしく、美しい音色に心から癒されました。今年の音楽祭では、カメラワークを新たに導入したことで、臨場感のある映像を皆様にお届けすることができました。関係者の皆様に深く感謝します。2023年も皆様にとって素晴らしい一年になることを願っています。(厚生委員会 漢那 直也)



忘年会のお楽しみ、
大海研1階「お魚倶楽部はま」の
特製オードブル



会場とオンラインで視聴された音楽祭



新スタッフ紹介

最近着任したスタッフを紹介します。①氏名、②所属、③こんな仕事をしています、④ひとこと

- ①干場 康博(ほしば やすひろ)
- ②海洋生物資源部門 特任助教
- ③数値モデルを用いて、特に沿岸域で物理から物質循環までのシミュレーションを行っています。河川水、地下水や氷河融解水が海に流出し、栄養塩、海洋生態系や土砂懸濁物はどのようにふるまうのか興味は尽きません。
- ④AORIテニス部に所属するかたわら、AORI公認を目指すバンドFluctuationsにも参加しており、運動系と文科系の趣味を両方極めていきたいと思っています。



大海研一般公開にて
テーパーくんと共に

- ①宮入 陽介(みやいり ようすけ)
- ②先端分析研究推進室 特任助教
- ③加速器質量分析計を中心とした年代測定の研究をしています。新たな分析技術開発を絡めた地球科学の研究が自分の強みかと思えます。
- ④大海研にはポスト時代からお世話になっており「新スタッフ紹介」と言われると、ちょっと気恥ずかしい感じもあるのですが、柏キャンパス移転準備作業から携わった大気海洋研究所には愛着があります。今後ともよろしくお願いいたします！



- ①高須賀 大輔(たかすか だいすけ)
- ②気候モデリング研究部門 特任助教
- ③雲・降水活動が活発で、大気大循環において重要な領域である熱帯域の気象ダイナミクスについて研究しています。最近では、より精緻な気象・気候の理解と予測に資するために、全球高解像度(kmスケール)での気候シミュレーションの実施・そのためのモデル改良も進めています。
- ④大海研には大学院生として所属していましたが、修了後およそ2年半ぶりに戻ってきました(広い空と冬の強風に懐かしさ)。音楽が趣味で、音楽祭には私がOBでいる間もバンド演奏で何度か出演させていただきました。息抜きに講堂のピアノを使おうか画策中です。



著者による 新刊紹介



なぜ君たちはグルグル回るのか
海の動物たちの謎
たぐさんのふしぎ 2022年11月号
佐藤 克文(著) きのした ちひろ(画)
25×20cm・40ページ・770円(税込)
2022年11月・福音館書店 刊

小学校高学年向けの絵本です。私(佐藤)が文章とストーリーを構成し、絵を描いてくれたのは当研究室で学位を取得した木下千尋さん。パイオロギングによって明らかになった研究成果と、新たに見つかった謎の行動を紹介すると共に、大学院生が楽しそうに野外調査やデータ解析に勤む様子を描写しました。絶対的な自信作なので、是非!

(佐藤 克文)

■福音館書店 - なぜ君たちはグルグル回るのか
海の動物たちの謎
<https://www.fukuinkan.co.jp/book/?id=7040>



新種発見!

見つけて、調べて、名付ける方法

馬場 友希・福田 宏(編)
四六判・224ページ・1,870円(税込)
2022年12月・山と溪谷社 刊
ISBN : 978-4-635-06320-3

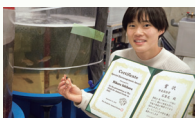
新種の生物がどのように見つかったか、それいどんな学名・和名を付けたか、ましてやその過程でどれだけ苦労したかは、科学どころか分類学においても全く重要ではない。にもかかわらず「新種発見のエピソード」は何故か人を強く惹きつけるようである。新種の数だけ物語がある。本書では4歳児から百戦錬磨の研究者まで、様々な立場の21人が関わった19のエピソードが紹介される。新種が見つかるのは深海や密林の奥だけではなく、自宅の駐車場やSNS上だったりもする。2019年に大槌湾から記載した「オオヨツハモガニ」発見のエピソードをTwitter上で披露したところ、執筆者として声がかかった。新種も人との縁もどこに繋がっているかわからない。(大土 直哉 ※分担執筆)

■山と溪谷社 - 新種発見! 見つけて、調べて、名付ける方法
<https://www.yamakei.co.jp/products/2822063200.html>



石原 光

海洋生命科学部門(大学院理学系研究科 生物科学専攻) 修士課程
ユニーク会 第7回研究会 発表奨励賞 [2022年9月]
受賞題目: 口内保育を行うテンジクダイ科魚類における末梢・中枢システムの解明



中山 新

海洋生物資源部門(大学院農学生命科学研究科 水圏生物科学専攻)博士課程
ユニーク会 第7回研究会 最優秀口頭発表賞 [2022年9月]
受賞題目: 偏光距離を用いたエゾハリイカの求愛ディスプレイの視認性評価



善岡 祐輝

海洋生命科学部門(大学院新領域創成科学研究科 自然環境学専攻)博士課程
第81回日本寄生虫学会東日本支部大会・日本共生生物学会第6回大会合同大会 ベストプレゼンテーション賞 [2022年10月]
受賞題目: サンゴ-褐虫藻共生系の分子機構:異なる褐虫藻に対する宿主の遺伝子応答から探る



受賞

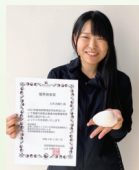
板倉 光 助教

海洋生物資源部門
水産海洋学会創立60周年記念大会 若手優秀講演賞 [2022年11月]
発表題目: Tracking oxy-thermal habitat compression encountered by Chesapeake Bay striped bass through acoustic telemetry



三木 志緒乃

海洋化学部門(大学院理学系研究科 地球惑星科学専攻)修士課程
第8回地球環境史学会年会 優秀発表賞 [2022年11月]
発表題目: 長寿二枚貝ピノスガイの貝殻成長線解析と酸素同位体比分析による高時間解像度古気候復元



近藤 唯貴

海洋生態系科学部門(大学院理学系研究科 生物科学専攻)修士過程
日本貝類学会 令和4年度大会 学生最優秀発表賞 [2022年11月]
受賞題目: 両側回遊性貝類の長寿命進化



Yi-Ling Chiu 特任研究員

海洋生命科学部門
日本サンゴ礁学会 第25回大会 最優秀ポスター発表賞 [2022年11月]
発表演題: An attempt to identify the possible heat-tolerance individuals of Acropora tenuis using SNP markers



井村 裕紀

気候モデリング研究部門(大学院理学系研究科 地球惑星科学専攻)修士課程
日本気象学会2022年度秋季大会 松野賞 [2022年11月]
発表題目: 全球気候モデルMIROC6における北極域の雲・降水・放射相互作用の解析



芳村 圭 兼務教授(生産技術研究所 教授)

気候変動現象研究部門
総務省異能vationプログラム 2022年度「異能ジェネレーションアワード」分野賞 [2023年1月]
受賞題目: 宇宙から観測した「重い水蒸気」で天気予報を変える



人事異動一覧 ※R.4.12~R.5.2

□ 特定有期雇用教職員

発令日	氏名	異動内容	所属・職名	旧所属・職名(本務所属・職名)
R5.2.1	樋口 富彦	採用	海洋生物資源部門 特任助教	海洋生物資源部門 特任研究員
R5.2.28	萩原 聖士	退職		海洋生物資源部門 特任講師

*特任研究員、学術支援職員、技術補佐員、事務補佐員については省略

Ocean Breeze 第41号

発行日/2023年3月23日 編集・発行/東京大学大気海洋研究所 広報委員会・出版編集小委員会・広報戦略室
〒277-8564 千葉県柏市柏の葉5-1-5 電話/04-7136-6006(代表) FAX/04-7136-6039
E-mail/kouhou@aori.u-tokyo.ac.jp URL/www.aori.u-tokyo.ac.jp
デザイン/田内重春 印刷/ウィックス

バックナンバーは大気海洋研究所WEBサイト「ニュースレター」ページでご覧いただけます。
<https://www.aori.u-tokyo.ac.jp/newsletter/>

